

## 『若い芸術家の肖像』の中の女性像

児嶋 一 男

### 序

イエイツに紹介されて知己を得ていたパウンドの助力によりジョイスの『若い芸術家の肖像<sup>1)</sup>』(以下 *A Portrait*) は、雑誌「エゴイスト」に1914年2月に連載が開始される。連載は1915年9月に完結し、同誌の編集長ハリエット・ウィーヴァの尽力の結果1916年12月にアメリカで一冊本として刊行される。翌年イギリス版がロンドンで出版されるが、ジョイス作品の常として世間の評価は両極に分れる。

…その文章は出版に携わる読者にはおもしろいものかもしれないが、本を読む大衆の中の普通の人々には退屈極まるものである…この本はあまりにも散漫で、支離滅裂、慎しみが無く、しかも醜悪な物、醜悪な言葉がひときわ目につくものである<sup>2)</sup>。

ジョイスの新刊 *A Portrait* はジェズイットの青年教育に関する驚くべき程力強く異常に汚ない研究であり…ジョイスは賢明な小説家ではあるが、下水

- 1) テキストには James Joyce: *A Portrait of the Artist as a Young Man* (Penguin Books, 1976) を使用しました。文中引用箇所は「 」で示し、何箇所かに出てくる語句、表現以外は引用した頁を ( ) に示しました。テキストと引用文献の翻訳は全て拙訳です。
- 2) Deming, Robert H. (ed.): “Reader’s report on *A Portrait of the Artist*”, *James Joyce: The Critical Heritage* (London: Routledge & Keagan Paul, 1970), p. 81.

の汚穢物に関する論文で一簾の人物になれていたように思える<sup>3)</sup>。

批判の中心は物語の展開に摺み所が無い点と醜美を問わぬ言葉の使用、表現に置かれている。これらの皮相的見解に対して、その見識を表層より深層にまで及ばせて、そこから作品の価値を見出した人々も多い。 *Dubliners* によって既に目を引かれていたアイエツやウインダム・ルイス、ジョージ・ムアなどは *A Portrait* の連載開始直後より尋常ならぬジョイスの才能について書簡を交換している。代表例として H・G・ウエルズのジョイス評を紹介する。

…ジョイスを普通の感覚基準の持ち主と考えて批判するのは不当である…  
この本のおもしろさはその本質をなす尽きることの無い写実性の中にある<sup>4)</sup>。

感性が常人をはるかに超越していた人物の作品であり、徹底した写実的描写がこの本の生命であると主張するウエルズの批評の正当性を弁護する論としてジョイス自身のエピファニー論があげられる。

この些事によって彼が思いついたのはエピファニー集という本にそういう多くの瞬間を収集することであった。言葉や身振りの卑俗性の中か精神それ自体の持つ記憶されるべき相の中に、突然生じる精神の顕現を彼はエピファニーによってもくろんだのである。こうしたエピファニーがそれ自体、最も繊細かつ脆弱な瞬間であることを知って、それを極めて注意深く記録することが作家の役割だと信じた<sup>5)</sup>。

*A Portrait* がジョイスの自伝的要素を盛り沢山に含んでいる作品であることを衆知の事実とすれば、エルマンの伝記<sup>6)</sup> に表わされているジョイスの青年期の

3) Ibid., "A Study in Garbage", p. 85.

4) Ibid., "H. G. Wells, review, *Nation*" pp. 86-88.

5) Joyce, James: *Stephen Hero* (Jonathan Cape, 1975), p. 216.

6) Ellmann, Richard: *James Joyce*, (Oxford University Press, 1959)

## 『若い芸術家の肖像』の中の女性像

意識の変化を傍証としながら *A Portrait* の中にもくろまれたこの卑俗性を吟味することによって、ジョイス自身の創作意図を探ることも可能である。

さて *A Portrait* の主人公スティーヴン・ディーダラスは、幼少よりジェズイット教会学校で寮生活をしながら修道僧教育を受ける。altar boy に選ばれ、女性との接触を避けるために母親との抱擁すら拒否した聖人 Aloysius を middle name に戴くジョイス同様に模範的生徒であったスティーヴィンは、ジョイス自身の経験から推測して凡そ14歳頃に、おそらく最も卑俗な罪と教えられていたであろう女との性体験を持つ。この時の娼婦も含めて *A Portrait* には幾人かの女が数多くの場面で登場する。そして、こうした女達との接触の度に主人公の自意識が変化しているようである。そこで私は女をエピファニーの一例にとることにした。一つのエピファニーを詳細なる研究の題材にすることによって、スティーヴンの自意識とその反映としての女性像との間に存在する関係が明らかになり、若い芸術家スティーヴンに託された青年ジョイスの精神の顕現の過程を発見する一方法になり得ると判断したからである。

### 1. 母の影響力とメルセデスの探究

*A Portrait* は主人公の成長に伴って文体も変化発達する。幼年期から思春期を経て青年期に至る各年齢層にそっくりように、その年令の人間が書くような文体が当て嵌められている。しかし、これはあくまでも当時の心理を記憶に呼び戻しての表現である。*A Portrait* の冒頭は童話文体で書かれているが、これも幼児感覚を通しての幼い頃の回想である。したがって「この子がタックー坊やだった」という最初の自己規定は成長したスティーヴンにジョイスが定めさせたものである。

このタックー坊やの父親は片眼鏡を掛けており、顔はもじゃもじゃの髭に被われている。彼には父の素顔を直接に見ることはできない。寢床（寢小便）の感覚から覚えた湿・冷・暖の感覚は触知し得るものを彼に教える。同時期に彼は匂いの存在を知り、この嗅覚を通して母親は良い匂いに象徴されるものとし

てスティーヴンの意識に初登場する。乳幼児が生を享けて最初に触知するのは母親であるから、現実の容姿を掴めぬ父親と違って母によって与えられる触知の安心感は快感として彼の意識下に潜在する。続いて彼の意識に入ってくるのはチャールズ伯父さん、ダンテ伯母さん、ヴァンス家の両親である。自己の周囲にいる人人と自己を取り巻く世界の存在を彼は知ることになる。アイリーンは異性への潜在的な関心の始まりとして覚えられている。次に記憶されている回想は母親と伯母による「謝りなさい」という強要である。謝るべき内容は不明瞭のままに、ここで幼児回想に一応の区切りがつけられる。これらはスティーヴンの意識が未だ白紙状態の時期に印された印象である。

*A Portrait* の着想は1904年の *A Portrait of the Artist* 及び1911年にジョイスが自分で廃却した *Stephen Hero* に定められている。*A Portrait* の連載が終了する1915年頃にヨーロッパではフロイト<sup>7)</sup> はすでに新しい精神の風土となっていたが、エルマンによると言葉の連想法という精神分析の手段にはジョイスは関心を示したが、精神分析そのものには興味を抱かなかったようである。しかし、この童話体で表現された幼児期の回想の中に、五感の芽生え、自己の周囲の外部環境の認識とそこから生ずる強要観念、人人や社会の中の対立する概念が全て盛り込まれているのは驚愕に値する。冒頭に作品の全展開を暗示する手法は既に *Dubliners* の幾篇かに見られていたものであるが、この後 *Ulysses* においては第11挿話 *Siren* に顕著に見られる如く各挿話の最初の段階に、更には時として各段落の第一行に全体像を凝縮させるという段階にまで完成される。ともあれ、私は一青年の外部世界の拡張と彼の内面世界の反比例的狭少化の過程を探っていくことにする。

場面はクロンゴウズ・ウッド校の運動場に移る。スティーヴンはナスティ・ローチに自分の名前と父親の職業について尋ねられる。明瞭な意識に基づいての自己規定の概念はここで初めて生じたと言える。しかし、本人自身の自我が未だ未成熟な状態であるため自分を「身体が小さく弱い者」と感じているだけで、父親との関係においてのみ自己規定がなされているにすぎない。つまり父

7) Sigmund Freud (1856-1939) が『夢の解釈』を出版したのは1900年、『精神分析学入門』を出版したのは1917年である。

### 『若い芸術家の肖像』の中の女性像

親の規定＝スティーヴンの規定であって、この自己にはまだ強さや力は備わっていない。

入寮時の母の印象は「良いお母さん」である。「良い匂い」に潜在していた印象は「良いお母さん」に通じる。さらに、炉格子の上にのせた母の内履きの「熱さ」と「良い匂い」の記憶は触知できる快感、自己の存在を安心して頼れる支柱的感覚につながってゆく。無意識ながらも母が自己の生命感の主軸である事には変わりがない。しかし、別れ際の母の「湿った涙」の感覚は、父親が自己規定の核になっていることとは無関係に、彼の存在感に不安の影を投げかける。母親は自我が未だ形を為さない時分に既に根源的な所から自己の存在感の安定・不安定を左右する影響力を持つことになる。それでも原子状態にあるスティーヴンの自我は母親に対する明確な定義付けを友人に迫られたことを機にして独自の道を歩み始めようとする。「寝る前にお母さんとキスをするか」という母親との接触についての問いに対する適切な答に迷い、逡巡する彼の内側で母と自己という観念が発達し始める。自我の独立は母からの分離によって芽生えていく。

スティーヴン・ディーダラス  
初等クラス  
クロンゴウズ・ウッド校  
サリンズ  
キルディア州  
アイルランド  
ヨーロッパ  
世界  
宇宙

(16頁)

自己規定は地理の教科書の表紙の見返しに書いた言葉によってもさらに前進させられる。母親からの分離によって芽生えた自我は、自己の属する外部世界と自身との関わりあいを認識する作業へと移っていく。自己を取り巻く環境を

見定めて、自己の空間的位置付けを確認しようというのである。しかし、これは宇宙を越えた所で不可能になる。これより先の超越した世界を認識できるのは神だけである。個別の自己の規定のための外部認識が無限、超存在の範囲に至ってしまったので、神を意識下に残存させたまま彼は下段の宇宙から逆に根源へと溯ることにする。すると以前に運動場で覚えた「身体の小さい自分」とは質を異にする卑少の感情を彼は覚えることになる。

神と接する礼拝堂には「神聖な匂い」の他に「冷たい夜の匂い」があったことを彼は思い出す。ミサに席を占める信仰心の厚い百姓の匂いは神聖ではなかった。しかし、彼らの百姓家で眠ったらすてきであろうとスティーヴンは想像する。ここで重要なエピソードとして子供を抱いて戸口に佇む女が彼の目に映る。この姿には馬小屋のマリアとキリストの姿を彷彿させるものがある。と同時に百姓家に住む神聖ならざる女の顔も浮んでくる。礼拝堂ではマリアと想われる女が、神聖でない匂いに包まれた時には、母との接触によって得られた感覚によく似た直情・直截的な快感＝安らぎをスティーヴンに誘う女になるのである。

Hary Stone<sup>8)</sup> はイェイツの *The Celtic Twilight* を引き合いにして聖母マリアと俗界の女の二重の像を *Araby* のマンガンの姉に想いを浮べたが、スティーヴンにとって女性とは表裏に聖母と実母の肖像を併せ持つもののようなのである。

クリスマス・ディナーの晩の口論はスティーヴンの耳に残っている。司祭や牧師への絶対服従を主張するダンテ伯母さんに接近を禁じられる娘として、アイリーンはスティーヴンの世界に登場する。彼女は「長く白い細く冷たい柔らかな手」を通して知覚される。彼にとって彼女は視覚、触覚に触れる確実な存在である。彼女の手の持つ冷たさと白さからは「象牙の塔」が連想され、陽の光に輝く金髪は「黄金の家」の映像につながる。両者はダンテ伯母さんの言う聖母マリアの象徴である。しかしこの時のアイリーンは百姓家の女と同じく卑俗に触知され得るマリアの範疇に入れられる。プロテスタントの家の娘であるアイリーンに狂信的カソリック教徒のダンテ伯母さんが近付くなど言うのは、

8) Stone, Hary: "Araby and the Writings of James Joyce", Scholes and Litz (eds.): *James Joyce, Text, Criticism, and Notes* に転載されているものを参照。

### 『若い芸術家の肖像』の中の女性像

両宗派のアイランドにおける軋轢の歴史から生じた忌避嫌悪感ばかりではなく、カソリック信徒の帰依する聖母マリアを言語道断にも邪悪化した姿をアイリーンにみていたからかもしれない。現実の Mrs. Dante Cornway は夫に情婦と一緒に逃げられてから性的不道徳を極端に蔑視し、独立運動の英雄パーネルを他のアイランド人よりも激しくこの道徳律で弾劾してしまうような人物であった。スティーヴン＝ジョイスがクリスマスの晩餐の大人達のやりとりから伯母さんの禁じるもの、忌み嫌うものの性質を嗅ぎ取るのはそれ程困難なことではない。

上級生の学寮脱出事件とドーラン神父の不当な懲罰に抗議した校長への直訴事件を経て、待望の夏休みに入りスティーヴンは帰省する。父や伯父と散歩しては周囲の事物に目を配り、社会というものの存在に気が始める。宇宙、神にまで及んだ観念的な自己規定の範囲に、具体的に現実的な世間という枠付けが課されてくる。『モンテ・クリスト伯』と奇怪な冒険物語に夢中になるのはこの頃のことである。新学期になったが、父親の失敗で家庭の経済が破綻し、学校に戻らなくてよくなり安心する。ジョイスの弟スタニスラスによると<sup>9)</sup>、スティーヴンから受ける印象ほどには、格闘技は駄目にしても、ジョイスは運動が不得手ではなかったようだが、父の友人の元選手に徒競争の特別指導を受けたり、自分勝手にダブリンの街を遊び歩きまわっていたこの時期に、ふとスティーヴンは牛乳配達夫の生涯を自分に当て嵌めてみる。しかし自己規定の苦悩を全然覚えぬという意味で安楽な生活に、自己を放棄するという恐怖を直観的に悟ってしまう。スティーヴンはメルセデスの元に戻る。モンテ・クリスト伯と同様にスティーヴンにとって虚構のメルセデスが帰着先となる。実母・アイリーン・百姓家の女の触知による実在感を脱して本質的に自我を発展させる契機はメルセデスに暗示されるのである。ただし、スティーヴンは *Ulysses* における大きな主題の一つである *betrayal* をメルセデスには感じるとはいえないようである。

9) Joyce, Stanislaus: *My Brother's Keeper*, (Faber and Faber, 1982)

## 2. アイリーンの増殖とメルセデスの屈服

二台の大きな黄色い馬車がある朝戸口の前に止まって男達が家にどやどやと入って来て、家財道具を持ち出した。家具は藁屑やロープの切れ端が散らばる前庭から荒々しく押し出されて、門の所の巨大な馬車に積みこまれた。  
(62頁)

自己規定の目標は自分自身のメルセデスを探すことに定まったものの、現実的な生活は両親に依存したままである。エルマン言う所のジョイス家の根強い遺伝的特質（経済観念の欠如）を父サイモン・ディーダラス（＝ジョン・ジョイス）が発揮したために家運は傾き、スティーヴンの不安は募る。

彼はハロルズ・クロスでの子供たちのパーティの中に座っていた…音楽と笑い声の中で彼女の視線が彼の居る隅に移ろい来ては彼の心に媚びたり、へつらったり、また彼の心を求めたり、興奮させたりする…彼女のハァッと吐いたばかりの暖かい息…彼女の方もぼくに抱き留めて欲しいと思っている…誰も見ていない。抱き締めてキスができる。  
(68—70頁)

現実の不安は安直と知りながらも手近な安定感に魅かれ易いものである。パーティで一緒になった娘の「媚びる視線」と「暖かい息」は実母に潜んでいた快感であり、たとえこの時は抱擁も接吻も抑えたとしても、メルセデスを探し求める彼の内部には思春期の感情と相俟って新たなるアイリーン＝EC（エマ・クレイ）<sup>10)</sup>の像が募っていく。

10) 1906年3月13日付けのグラント・リチャードに宛てたジョイスの手紙によると *Stephen Hero* は25章まで書き終えられており、焼却を逃れた遺稿断片を読んでみるとその内容素材は *A Portrait* 第5章のユニヴァシティ・カレッジ在学期間に相当している。*Stephen Hero* の二分の一弱の分量になったことから、*A Portrait* への書き直しの過程でエマ・クレイを漠とした存在に変化させたジョイスの意識が「EC」に示されているように思われる。



『若い芸術家の肖像』の中の女性像

ベルヴェディア校に戻っての聖霊降誕祭の芝居の晩、観劇に来た EC との仲を認めるように友人ヘロンに迫られたスティーヴンは、「ワレハ告解セリ」をおどけた調子で唱えてその場を逃れる。ところが先生に作文の異端性を注意、指摘された後で、傾倒するバイロンが悪い奴だと認めるように再びヘロンに強要された時は敢然と拒絶する。メルセデスを探すことによって創作という虚構の世界に自己形而の意図を読みとろうとする意識が芽生えていたスティーヴンにとっては、絶対権威の宗教はもはや口先の「おどけ」に使える程の些事にすぎなくなっている。しかし女性の触知の誘惑はますます募っていく。

それから暗闇のなかで他の二人には見えないように彼は片方の指先をもう一方の手の掌に、触れるか触れないかぐらいに軽く当ててみた。しかし彼女の指が押す力はずっと軽いのはるかに力強かった。突然その指の感触の記憶が目に見えぬ波のように彼の頭と身体を横切った。(83頁)

彼女の触知感覚は強烈に潜在し続けている。メルセデスの追求に無縁なものとなれば、体面の問題も厭わずにそこから自己を亡命させて口を閉じてしまう。些事に惑わされぬためには不敬と認めつつも賢く言い逃れることも敢えてする。にも関わらず母の快感は様々な女性に外観を変えてはもっと直接的な快楽の形に強化してスティーヴンに肉迫してくる。自己の規定への信念とそれに反する邪まな誘惑の間で彼は揺れ動く。

父と夜汽車でコークへ行く。学寮の机に若い頃父が刻んだ Foetus の文字は彼に露骨に性交を思い出させる。胎児は彼にとってはあからさまな男女の交わりの痕跡なのである。

その時まで自分の心の中の野獣的で個有な病弊のように思っていたものの痕跡を外界に見出したことは彼に衝撃を与えた。奇怪な妄想が群れなして彼の記憶に入り込んで来るのであった…彼はその想いに易々と屈服し、それらが彼の知性に押し入って卑しめるままにしておいた…机の汚れた木に彫られた文字は彼の肉体の弱さと不毛の熱意を嘲り、彼自身の病んだ不潔な乱行に

に対する自己嫌悪を感じさせながら彼を見つめていた。(90—91頁)

触知の快感が眼の前に具現化された今、メルセデスという観念の内に見出そうとしている自己規定は欺瞞、偽りのものではないのか。所詮は母から脱しきれぬ病弊の自我が自己の本質ではないのか。聖母マリアによって肉欲に耽ることは禁じられているが、それは自己の真実の姿を抑圧し自らを欺いていることではないのか。実母の影響力を強固に行使するアイリーン、EC、に自我が身動きとれぬ程に結び付けられていることをスティーヴンは自覚する。彼は自己規定を整理する。

ぼくはスティーヴン・ディーダラス。サイモン・ディーダラスという名の父親と並んで歩いている。ぼくたちはアイルランドのコークにいる。コークは街である。二人の部屋はヴィクトリア・ホテルにある。ヴィクトリアとスティーヴンとサイモン。サイモンとスティーヴンとヴィクトリア。名前。

(93頁)

規定の媒介となるものは名前にある。〈複数の喜び〉を表わす自分の名を気に入っていたように、ジョイスは文字に現われる表意の効果を重要視する。ただし、この時点のスティーヴンはローマのキリスト教の殉教者ステパノスとギリシア神話の工匠ダイダロスに暗示される名前による手掛かりに気付いてはいない。規定の範囲はコークの街から出ず、神の無限には至らない。混沌とした自己認識は世俗の現実社会に狭められてしまっている。アイリーン、EC 世界で到達する自己規定は「自己＝病弊」となる。「冷たくて残虐な愛の無い情欲以外に魂の中に動くものが何もない」(96頁) ことになってしまうのである。

煩悶は募っていく。スティーヴンは論文の賞金を手に入れるが、僅かの間豪遊して浪費してしまう。病弊の自己という認識が深まるにつれて彼の失望は大きくなる。煩悶は解消されずに肉欲が増していく。自分の本質的な自我は情欲の対象として実在の女性を欲するものなのか、あるいは信仰の対象として霊的女性＝聖母マリアを求めるものなのかを彼は自己判定する。自己に両方の性

『若い芸術家の肖像』の中の女性像

質が備わっているとしたら、完全なる一つの純粹自我を得るにはどちらか一方に耽溺するしかない。良心の呵責に苦しむ自己も自身の姿には違いないが、規定のためには常に二つの自己がなければならなかった。規定する自己と規定される自己である。自らが自らの観察者であることを意識した生活に、忘我の瞬間はなかったはずである。スティーヴンには無我夢中の経験はなかったはずである。後悔する面の裏側に夜の好色に溺れる自己の存在も認めざるを得なくなる。焦燥感や燃え上る欲望の疼きに後悔し、臃んだ自己を無念に思いながら彼は一つの純自我、飽和の自己を得る方向へ向う。彼は狭く汚れた路地を彷徨するようになる。母の安心感はアイリーン、ECに転化して、さらには売春婦の暗い快感へと転化する。

時折だが欲望の合間に倦んだ快樂がもっと穏かな倦怠に場所を譲る時に、メルセデスの映像が彼の記憶の背景を通り過ぎた…こういう瞬間が通り過ぎると心を疲れさず欲情の炎が再び燃え上った…突然動いて女は彼の頭をさげさせて彼の唇に自分の唇にあわせ…その唇と唇の間に彼は未知のびくびくするような圧力を、罪の恍惚よりも暗く、音や香りよりも柔らかな感触を感じとっていた。 (99—101頁)

彼は決してメルセデスを忘れてはいない。彼女は彼の精神の虚構の琴線に触れる部分の深奥に身を潜めているにすぎない。しかし、邪悪な誘惑の叫び声は強大である。それは彼を幼い触覚への郷愁、母への回帰へと誘なう。母の唇と良き匂い、百姓女の素適な匂い、アイリーン、ECの柔かい手の思い出はすべて触知の安心感であり、彼は歓喜のうちに罪に耽溺し、その頂点で彼のメルセデスは売春婦に屈服してしまう。メルセデスを見失ってスティーヴンの自己規定は暗礁にのりあげてしまう。

### 3. 聖母の増殖・依然暗礁

メルセデス消失後は「柔らかな匂いのする肉体から彼の罪を愛する魂への呼びかけ」(102頁)に答える行為が続く。スティーヴンの内部では自己規定の追求が自我の本質の純粹性に変えられてしまっている。本能が欲していると思われるものと合致してさえいれば、その姿こそ自分本来の自己ではないのか。しかし激しい自己耽溺は不毛の行為であった。彼の心身は徐々に消耗していき、彼の洞察力、感性は次第に麻痺していく。遂に彼は空虚な無関心の状態に陥ってしまう。

冷たく澄んだ無関心が彼の魂の内を支配していた…情熱が消え失せた中に残る混沌は自己についての冷たく無関心な認識であった。(103頁)

彼は罪の快樂と虚無感に馮かれてしまったのである。もはや墮獄の罪からは逃れられず、一瞬のうちに悔悟の間も無く地獄に落とされるかもしれない。神の断罪、天罰を恐れはするが、彼は神に対して偽りの忠誠を誓ってはいないことに誇りをもつ。果して自分以外の人々は心中の昏迷を痛感することなく、自己に忠実な姿を神に誓った約束に合致させているのか。信心を全く個人の問題として捉えて完全無比なる信仰心を冷徹なまでに実行するというジョイスの信念の萌芽がここに見られる。*Dubliners* 以来の作品系列の流れの中で、司祭の姿を麻痺状態に描くのは、宗教職に、信仰に徹底的な忠誠心を要求するジョイス自身の意識の逆説的な反映なのである。さてスティーヴンの命題は聖母マリアによって再び提示される。彼女が彼に「静修」を命じたのである。

静修とは生活の煩いから、日常世界の煩わしさから、しばらく身を引いて、我我の良心の状態を吟味し、神聖なる宗教の神秘について考え、何故我我がこの世に在るのかをよりよく理解することを意味します。(109頁)

『若い芸術家の肖像』の中の女性像

以前に彼は独立した自己規定をするために「現実の母」からの分離を考えてみた。言わば母親を分離規定するところから彼自身の自我の確立は出発したのである。今、規定の道は「神聖な母」に向う。暗礁にのりあげた自我はそこに安座せず、混沌の中で動き出し、聖母マリアを求めて活路を開きそうな気配である。ではマリアがメルセデスなのだろうか。

校長によるダンテの『神曲』張りの死と審判、地獄と神についての説教が続く。

…彼は自分が既に死んでしまっていることを、自分の魂が肉体という鞆から振じ抜かれてしまって、宇宙を真逆様に転がり落ちていることを恐れた。

(125頁)

冷たく無関心で何も感じないのは自分がもう死人になっているからではないのかとスティーヴンは恐怖に戦く。肉体が死んでから一瞬の内に魂は審判を受ける。今はその審判の決定を待っている瞬間なのではないだろうか。この観念的には長いと人間が感じている生命の後には地獄の永劫が待っている。悔悟の念を努めて無視し、触知の情感に陶醉することによって得られていた自己存在感は、罪としての耽溺を痛烈に後悔することによって得られる自己の存在感へと移行する。

まだ時間があった。おおマリア…汚れ無き処女よ、死の淵から我を救い給え。(126頁)でも身体のある部分は理解しているのだろうか、それとも？

(139頁)あの時のそれは自分なのか、それとも卑俗な魂によって動かされた非人間的なものなのか？ (140頁)彼は悔悟の誓いを唱え、暗い本堂の隅で祈った…恩寵の中で平和と美徳と抑制の暮らしを送ることは美しいことであろう。(145—146頁)

彼はひたすらマリアを求める。悔いを改めて許されることを真剣に願い始める。スティーヴンはチャーチ通りにある礼拝堂に行き、司祭の前で姦淫の罪を

すべて告解する。しかし、くり返しわきあがる欲望は自己規定再開の念を妨げる。彼は混沌のなかでもがき苦しみ、執拗にマリアに縋る。告解後は毎日功德の行へと自己の魂を駆り立てる。冷徹な信心を実行しようという気概は五感の抑止へと向う。彼は大罪の根源である実母群の触知快感を自己の内から閉め出そうとする。本能的な衝動と戦いながら自己の冷却化を図る。しかし、これは抑圧に没頭しているにすぎない。この場合肉欲と徳行とは耽溺を中心点とする同一軸の両極に存在しているにすぎない。たとえ片方に自我が依存していても、完全無欠の形にはなれないが故に、未飽和の部分が次第に肥大化して、もう一方の極に依存の中心を求めようになる。このように耽溺の対象としてみる時、マリアは非常に現実的媒介となる。抑制という自己陶醉の極の形成核としての聖母は実母と同化してしまうのである。よってマリアはメルセデスになり得ず、スティーヴンの自己規定は再び暗礁にのりあげてしまう。

#### 4. 流れの中のメルセデスと伝説の工匠

内部の混沌状態とは無関係に、従順で模範的な修道士候補生というスティーヴンの印象が周囲によって形成されている。スティーヴンは天職として修道士になることを司祭に勧められる。幼少からの憧れでもあり、誇らしい感情も入り交じって、宗教的秩序の世界から逃れなければならないと思っている彼は大いに動揺する。彼の冷ややかな目に映る聖母マリアの聖堂は色褪せた青白い建物でしかない。彼は「ジェズイット会士、スティーヴン・ディーダラス師」という自己規定を拒否する。彼はこれまで女性との関係を契機にしながら自己規定に専心し苦悩してきた。自我の本質を信仰＝聖母マリアにも触知の実存感＝実在の母にも頼ることはできなかったが、昏迷の経験は彼にとっては修練の積み重ねになっていた。

彼方の世界から一つの声が呼びかけている。

— おーい、ステパノス！

『若い芸術家の肖像』の中の女性像

— ほら、ダイダロスのおでした…

彼の奇妙な名前は予言のように思われた…海の上を太陽に向って天翔る鷹のような男とは生れながらにして仕えるべき目的、幼年時代と少年時代の霧の中で追い求めてきた目的の予言…そうだ！そうだ！そうなのだ！同じ名を戴く偉大な工匠のように魂の自由と力から誇らかに創り出すのだ。生命あるものを、新しく飛翔する美しくて、触知できない、不滅のものを。

(168—170頁)

自己規定の啓示の瞬間である。両性の母達から独立してメルセデス探究を再開したその時に伝説の工匠の名は意味あるものとして彼の耳に響いたのである。ここで究極的に彼の自己は芸術家に規定される。ではメルセデスはどこにいるのか？

彼は躍動する生命感を感じつつリフィ河畔を進んでいく。そして流れの中に立つ鳥のような少女を見つける。

彼女の両腿は象牙のようにふっくらと柔らかな色をしていて、ほほ尻のあたりまで剥き出しになっており、下穿きの白い縁飾りは柔らかな白い羽毛のようである…彼女の長い金髪は少女らしく、その顔もまた少女のようでこの世の美の驚異の調子を帯びている…この世に生をなす若さと美の天使が生命のかぐわしき宮廷からの使節となって、恍惚の瞬間に目の前に過ちと栄光に至るあらゆる道の門を開け放ってくれる。〔傍点、筆者〕 (171—172頁)

象牙と金髪は聖母マリアを暗示し、あらわな両腿と女の髪は性的触知感を暗示する。百姓女の二重イメージが浄化されてこの少女の姿に融合されたのである。彼女こそメルセデスなのである。この娘が実在の娘かどうかは *Ulysses* 第13挿話 *Naucicaca* の海辺の少女、ガーティ同様に議論の別れるところだが、ここでは区別する必要は無い。メルセデスが虚構の存在でありながらスティーヴンに強烈に実存感を与えていたように、問題はスティーヴン（もしくはブルーム）という観る側の意識にある。実母に根付き具現された実在感から独立してメル

セデスに代表される虚構の实在感を自意識に反映させた今こそスティーヴンは生命ある虚構の工匠という自己規定を得たのである。

## 5. 美の哲学と芸術の肖像

スティーヴンは大学生になっている。彼は他人に迎合することがない。彼の孤独を慰めるものはエリザベス朝の奔放で優雅な詩とアリストテレスの哲学とトマス・アクィナスの美学論である。彼は友人の主張するアイルランド民族主義運動への参加を拒み、世界平和運動の署名も拒否する。彼の関心は学監や友人と芸術についての議論をかわしながら、自分自身の美の哲学を確立することにある。自己を芸術家と規定した後の彼はその理論体系の形成に躍起になっている。

不適当な芸術によってかき立てられる感情は欲望とか嫌悪のように動的である。欲望は所有することを、何かに近付くことを促す。嫌悪はあるものを棄て去せたり、あるものから離れるようにと駆り立てる。これらをかき立てる芸術は、好色文学であれ教訓文学であれ、従って不適当な芸術である。故に美的感情とは静的なものである。欲望や嫌悪を超越して精神は引き留められ、高められるのである。(204—205頁)

スティーヴンのくり返してきた卑劣なる欲望は、一時の飽和感に近付きたいという動的感情だったのである。そこから離れて俗世間を一切忌避するという信心もまた動的感情であって、精神を高揚させる美的感情ではなかったのである。しかし、こうした美学理念と個人の持つ動的感情は同じ次元では述べられない。スティーヴンには欲望も嫌悪も残存している。頸筋に感じる虱の痒みに、通りすぎる彼女の姿に欲情の思い出がよぎることもある。ただし彼女がメルセデスでないことは忘れていないから、自己の本質的な規定を歪めるものでない限り、誰にであれ、何にであれ憐れみと寛容の心を持って接している。芸術創作を自



『若い芸術家の肖像』の中の女性像

己の信仰と宣言した後では、母の自我への影響力は完全に消失してしまっている<sup>11)</sup>。既存のすべての宗教もまったく無用になっている。それは「狂った修道女のわめき声」でしかない。彼は怒ったようにそれを耳から払い除ける。

おお！ 想像力の処女なる胎内で言葉は肉になった。(217頁)

明け方に、スティーヴンの自己啓示は再確認される。メルセデスは想像力の胎児であり、現実の言葉という肉となって生を享け、詩句へと育っていく。創造の世界で母と子の絆は芸術家と芸術の関係に昇華されるのである。その結果、不要な女は追放するという気概は一層鋭くなる。よって女と戯れる信仰の使徒に、「暗い女のような目つき」の司祭に、「女のような気づかい」を見せる学監に、女達に、ジョイスが *Dubliners* で同国の人々の麻痺した精神を冷徹に見据えたその目に浮べたように、スティーヴンは痛烈なる決別の意志を示すのである。

現実の世界の母は様々な女に姿を変えては彼の欲望をかきたてた。「雌豚のアイランド」も母なる国への忠誠心の形をとって彼を脅威にさらした。聖母マリアは私達日本人には実在感を覚えぬ存在かもしれないが、アイリッシュ・カソリックには、あるいは幼い頃からジェズイットのしつけや教育を受けた人間には紛れもなく実在する母である。しかし、この母も世俗的にとらえられると単なる自意識の抑圧にしかならなかった。世俗の女はすべて彼の内にある動的感情をかきたてるものである。

11) 「消失してしまっている」というのは実は正確ではない。1903年閏雲の情熱だけで飢えに苦しみながらも芸術の都パリに暮らしていたジョイスは、母危篤の電報を受け取って帰国する。この時、臨終の母による「祈り」の願いを、宗教と決別していた彼は強い信念をもって聞き入れないのだが、その決断は終生彼を苦しめることになる。翌年(1904年)、十年後を約束して故国を去ったジョイスの意地が *A Portrait* の実際の連載完結の年度(1905年)より一年早く本文最後の日付けを「ダブリン、1904年。トリエステ、1914年」と書かせたとしても、この時点では既に亡くなっている母への苦悩は表現されていない。しかし、ダイダロスの子イカロスの如く翼溶けて転落した後のジョイスの前述の苦しみは *Exiles* の主人公リチャードや *Ulysses* のスティーヴンに強く根付いている。

メルセデスは流れの中に佇む少女となって、虚構を具現する存在となっている。彼女は静的感情で捉えられる聖母であると同時に、実母の実在感も持ち合わせている。このように女性を区分する動的、静的認識は、スティーヴンにとっては適当な芸術と不適当な芸術を区別する方法なのである。とすれば *A Portrait* における女性像はジョイスの芸術像の精神的顕示 *epiphany* と捉えられて当然という結論になる。

*Ulysses* と *Finnegans Wake* においてジョイスは役柄の性的局面をモリー・ブルームに、母親的様相をアナ・リヴィア・プルラベルに配分したのであった<sup>12)</sup>。

現実と虚構の関係は *Ulysses* においては実在の作家の存在すら虚構の産物である作品が圧倒してしまうという関係に変わっていく。外部世界の拡張に反比例して意識世界を狭小化させる *Ulysses* におけるスティーヴンの姿は、普遍の存在となり得る芸術作品の前には芸術家も不用とばかりに、海に落ちたイカルスになってしまっているのである。エルマンの指摘するようにジョイスの女性に対する意識と創作の力は *Finnegans Wake* に向ってますます発展していくが、*A Portrait* におけるジョイスの分身スティーヴンは「いまだ知られざる<sup>おざ</sup>技に心を打ち込む」<sup>13)</sup> 未だ未だ若い芸術家なのである。

#### A Selected Bibliography

1. *Stephen le Héro*, (Gallimard, 1975).
2. *Ulysses*, (Penguin Books, 1977)
3. *Ulysses*, (Gallimard, 1978)

12) Ellmann, Richard: *James Joyce*, (Oxford University Press, 1959) p. 305.

13) *A Portrait* の巻頭に飾られているオウィディウスの『変形譚』の第8書188行。丸谷才一はここにも神話と現代化との照応というエリオットが *Ulysses* に評した手法がほのめかされていると指摘している。また行数記述はそのくだりを当れというジョイスの謎であると言っているが、一言一句に謎解きの妙を盛り込む *Ulysses* の趣向が *A Portrait* の巻頭にすでにみられるのは興味深い。

『若い芸術家の肖像』の中の女性像

4. *Finnegans Wake*, (Faber and Faber, 1975)
5. Anderson, Chesser G.: *James Joyce and His World*, (Thames & Hudson, 1967)
6. Buttigieg, Joseph A.: *Contexts for "A Portrait"*, (Univ. Microfilms, 1976)
7. Chase, W.: *Joyce: A Collection of Critical Essays*, (Twentieth Century Views Series, Prentice-Hall, 1974)
8. Davies, Stan G.: *James Joyce: A Portrait of the Artist*, (Stein & Day, 1975)
9. Gifford, Don: *Notes for Joyce: Dubliners and A Portrait of the Artist as a Young Man*, (Dutton, 1967)
10. Gross John: *Joyce*, (Fontana/Collins, 1976)
11. Hodgart, M.: *James Joyce: A Students Guide*, (Routledge & Kegan Paul, 1978)
12. Staley, Thomas F. & Benstock B. (eds.): *Approaches to Joyce's Portrait: Ten Essays*, (Univ. of Pittsburgh Press, 1970)
13. Gilbert, Stuart (ed.): *Letters of James Joyce*, (Viking Press, 1957)
14. Ellmann, Richard (ed.): *Letters, vol. II & III*, (Faber and Faber, 1966)

## A Portrait of the Women

### in *A Portrait of the Artist as a Young Man*

Kazuo Kojima

James Joyce means a sudden spiritual manifestation by an epiphany and therefore his artistic philosophy can be clarified by examining it closely.

Such many women as a real mother, Eileen, EC, a whore, The Virgin Mary and Mercedes appear in *A Portrait*. In every contact with one of them, Stephen's attitude to himself seems to change. I have discussed the women in the life of Stephen, Joyce's alter-ego, as an example of epiphanies and traced the process of his identification by studying the relation between his self-consciousness and the women as its reflection.

In the last chapter of this essay the women are divided into two aspects: one is recognized in reality and the other is identified as a fictitious being. A total fusion of these aspects is Joyce's philosophy of art and it is developed into Molly Bloom or Anna Livia Plurabelle.